

中世ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』における 頭韻詩の伝統とその乖離

上石 実加子

【要約】

イギリス中世ロマンスの傑作である『ガウェイン卿と緑の騎士』は、14世紀後半の中英語時代に成立した頭韻詩である。この詩は、フランス語系の詩から持ち込まれた脚韻というよりもむしろ、ゲルマン詩の伝統を受け継いだ古英語の強勢韻律法で構成される頭韻詩長詩行 (alliterative long line) を特徴とし、頭韻と脚韻の2つの韻律法を結合させ、北西ミッドランド方言で書かれている。

本論では、この詩に用いられた語彙や語法に注目しつつ、主人公ガウェインの描かれ方が、騎士の絶対的卓越を強調する頭韻詩の伝統をいかに受け継ぎ、同時にその描写がいかにガウェインの言動や行動とはズレが生じているのかを考察している。もはや時代遅れとなった理想化された伝統的騎士像を、ロンドンから隔絶された地で復活させたガウェイン詩人は、時代を反映した等身大の騎士像を描いたといえる。

(キーワード) : 頭韻詩復興、中世ロマンス、ガウェイン卿と緑の騎士

はじめに

『ガウェイン卿と緑の騎士』(*Sir Gawain and the Green Knight*) (以下 *SGGK* と略記) は、14世紀後半に成立した2530行から成る中英語 (ME.) の頭韻詩である。イギリス中世文学の多くが、戦争その他の火災や宗教上の理由などから焼失してしまった中で、この作品はそうした災禍を逃れて「コットン・ネロ A.x 第3」(Cotton MS. Nero A.x, Article 3) として大英博物館に所蔵され、写本に唯一原典が残されている中世ロマンスの傑作である。この写本には、ほかに『真珠』(*Pearl*)、『忍耐』(*Patience*)、『清純』(*Cleanness*) という3篇の英詩が入っており、「語彙、題材、スタイル、豊かな描写力など共通する点が多い」(厨川266) ことから、同一作者のものと考えられ、作者は「ガウェイン詩人」(Gawain-Poet) と呼ばれてきた。

1066年のノルマン征服以後、古英語 (OE.) のウェスト・サクソン語がイングランドの公用語ではなくなり、文学はイングランド各地の方言で書かれることになったが、歴史を遡れば、1200年頃から、ノルマン人とアングロ・サクソン人との融合が急速に進み出し、

古英語の伝統的な頭韻詩は、フランス文学の影響を受けつつ中英語の新しい脚韻詩へと移り変わりを見せ、頭韻によるいわゆる「強勢主体の韻文」(accentual verse)は、フランス語系の借入語によってアクセントが移動することも手伝い、音節を強調したフランス語形式の台頭に伴って、英語の詩における支配的な地位を失っていくことになる。

14世紀の中頃からは、ロンドンの教養ある人々の英語が次第に公用語として使われ始め、その中心にジェフリー・チョーサー(Geoffrey Chaucer, 1340?-1400)やジョン・ガワー(John Gower, 1325?-1408)がいたことは周知のとおりである。*SGGK*の作者であるガウエイン詩人は、彼等と同時代の詩人でありながら、ロンドンの方言ではなく、イングランド北西部の北西ミッドランド方言で詩を書いている。

英語史的に言えば、1340年頃から1400年頃の中英語時代にあつて、頭韻詩の伝統を強固に受け継ぐ詩群が形成された。古英語の頭韻詩に強い影響を受けたウィリアム・ラングランド(William Langland, 1330?-1400)が南ミッドランド方言で頭韻詩を書いているが、特に、イングランド北西部で頭韻詩の長詩行(long-line)¹の伝統を受け継ぐ作品が流行したことから、この現象は「頭韻詩復興」(Alliterative Revival)と呼ばれている。このリバイバルは、「地域的にフランスから輸入された新しい文化からは比較的隔絶し」ながら、「フランスの新しい作詩法には反発する保守的環境の中で反って頭韻詩が興った」(松浪 27)とされており、ガウエイン詩人にはこうした「中央のロンドンの新しいフランス流文学に対抗する意気込みがあった」(池上「Temptationについて」73)とする指摘は興味深い。しかし*SGGK*は、古英語の頭韻とフランス語の詩の脚韻という二つの系統の韻律法が結合した詩作法を採っている²。

*SGGK*という中世騎士道ロマンスについて、文学史的観点から言えば、この作品が書かれた14世紀には、騎士を描いてきたロマンスというジャンルそのものが「今にも消えようとしていた文学形式だった」(菊池『中世英語英文学Ⅲ』202)と言われている。ガウエイン詩人は、「フランスやドイツでは流行期をすぎたアーサー王伝説」(池上「Temptationについて」73)を背景として、すでに時代遅れとなっていた騎士道ロマンスを書いていたことになる。これは、12世紀に騎士階級が成立してから、13世紀の硬直化した騎士制度を経て、教会の敵と戦うキリスト教的騎士の理想は退廃し、騎士階級の担う社会的機能も、単に経済的な理由により上層階級を防衛するという世俗的なものへと変化していった時代性の中にあることを意味している。

本論は、中英語時代において「頭韻詩復興」の最中に成立した*SGGK*という中英語頭韻詩が、頭韻詩の伝統をどのように受け継ぎつつ、そこから乖離しているのかを考察すると共に、いわゆる「騎士道ロマンス」のコンベンショナリズムがどのように作品中に通底し、あるいは反目しているのかを、語彙、文体、描写の観点から考察するものである。

1. 頭韻を維持する形容詞

形容詞は、古英語時代の詩から頭韻文体の重要な要素となってきた。名詞を修飾する品詞として、特に様々な「属性」を表す形容詞を用いることは、「古英語、中英語を問わず、頭韻文体の伝統的手法」(鈴木「性格」184)であった。鈴木によれば、「属性」を表す形容詞は、中英語頭韻詩においてかなりの数に達し、それらの多くは比較的類似の意味を持っていたとある。

*SGGK*の主人公であるガウェインは、フランス他のロマンスにおいてもそうであるように、礼節を身につけた騎士として、「礼節」に関する属性形容詞が多く用いられている。その一例としては、例えば、“gode”(=good), “trwe”(=true, faithful), “gentyle”(=of gentle birth, noble), “semly”(=fair), “noble”(=noble)などがあるが、“gentyle”や“noble”は、中英語詩の流行語として、中英語期に初めて借入された語である。これらの形容詞はいずれも、ガウェインという人物の個性を表すためというよりも、「類型化」されることで理想の騎士のイメージを作り出す「理想化」に役かっていることになる(鈴木「性格」194参照)。

ガウェインが本詩にはじめて登場する際に用いられる形容詞は“gode”である。“gode Gawain”(l. 109)³として頭韻が踏まれている。これはOE.由来の形容詞であるが、例えばOE.詩の『ベーオウルフ』でも主人公ベーオウルフと頭韻する常時形容詞辞はない(同掲書187)という指摘があるように、頭韻詩において、主人公の名と同音ではじまる形容詞をそれに付することは習慣的ではなかったことが分かる。明らかに“gode”が頭韻を維持する形容詞としてガウェインに冠せられているといえるのではないだろうか。

厨川は、頭韻詩復興期の頭韻詩の作者らが、「人」や「武士」の意味を表すOE.系の同意語を幾つも使ったと指摘している。*SGGK*においても、“gome”, “renk”, “burne”, “wy3e”, “lede”, “freke”, “segge”はいずれも「人」または「武士」の意味を持ち、OE.ではそれぞれ“guma”, “rinc”, “beorn”, “wiga”, “lēode”, “freca”, “secg”(厨川210)と綴るOE.由来の同意語が使われている。類似の意味を持つ形容詞の使用と同様に、こうした名詞の同意語の多用もまた、頭韻詩の伝統的文体を踏襲する要素であると考えられるだろう。

田島は、こうした伝統的な頭韻語に加えて、これらを形容する形容詞が、名詞的に使われる「形容詞の名詞的用法」が中英語頭韻詩の顕著な文体的特徴であると指摘している。近代文法においても、形容詞が定冠詞や指示詞等を伴って「人」や「物」などを示す名詞として使われる“the rich”(=rich people)のような例はあるが、*SGGK*で名詞的に用いられた形容詞について、「特定の人物を指示する形容詞の種類が極めて豊富である」(田島74)という報告がある。事実、上記に挙げた属性形容詞は、頭韻を形成する上で重要な役割を果たしていたことは言うまでもない。

こうした男性を指示する形容詞以上に重要な役割を果たしていたのは、「女性」を指示する形容詞群だったと田島は指摘している(74-75)。例えば、ガウェイン卿が緑の騎士に会いに行く途中で立ち寄る城の主人パーティラックの奥方を示す形容詞は、“clere”や

“loueloker”、“menskful”、“swete” などがある。

- þe loueloker he lappez a lyttel in armez (l. 973)
- nay for soþe beau sir sayd þat swete (l. 1222)
- bi mary quop þe menskful me þynk hit an oþer (l. 1268)
- þou kyssedes my clere wyf þe cossez me raztez (l. 2351)

上記の形容詞はすべて頭韻を形成する語となっている。引用最後の“clere”以外は、すべて形容詞の名詞的用法で用いられていることが分かる。ここでの“clere”は、“my clere wyf”として“wyf”(=wife)を形容する“fair”の意味を持つ形容詞であるが、他にも“clear, bright”(Tolkien 172)の意味を持ち、作品内では装飾品や城の内装を形容する語としても用いられている。“loueloker”は、“lufly(ch)”や“louely(ch)”という近代英語の“lovely”に相当する語の比較級にあたるが、この形容詞の原級は、本作品において緑の騎士の毛髪を描写する際に使われている形容詞 (l. 419) として頭韻の要請に応じている語でもある。

SGGKに形容詞の名詞的用法が多いのは、特定の人物、特に女性を描写する形容詞が多いためであり、こうした形容詞の名詞的用法が、同時期の脚韻詩と較べても「女性を意味する語彙の不足を補う重要な手段であった」(田島 82) とする指摘は興味深い。古英語の伝統的な同意語を使用しつつ、中英語頭韻詩に顕著な属性形容詞と形容詞の名詞的用法の使用は、SGGKに同時期の脚韻詩にはなく、また伝統的な用法にはない頭韻の在り方を提供していたことが分かるのである。

2. 「聴かせる」ための「歴史的現在」の用法

中世の文学は「読まれるよりも聴かれることが主であった」(池上「自然」8)と言われるように、SGGKは「聞き手を楽しませることが第一義」(田口 14)といえるほど、豊かな物語性に満ち、「首斬り」の挑戦を受けるガウェインをめぐるシリアスな環境も、つねにユーモアに溢れた場面に彩られている。

水島は、SGGKが「聴衆にきかせる有効な手段として Historical Present と呼ばれる当時発達しつつあった手法」(水島「Historical Present(2)」647)を用いていると指摘している。“Historical Present”すなわち「歴史的現在」と近代英文法において呼ばれているものは、過去の出来事を、現在眼前に展開しているように物語る修辭的技法であることは言うまでもないが、英語史的には、このような用例は古フランス語の影響を受けて、「実質的にはMEになってから広くみとめられるようになった」(水島「Historical Present」462-63)ものである。過去の出来事を一様に過去時制で描くのではなく、現在時制を用いることによって、そこで今起こっているかのような臨場感を与える。この用法が“dramatic present”とも呼ばれる所以である。以下は、アーサー王の宮廷でのクリスマスを楽しむ

い宴会の最中、緑の騎士が馬に乗って宮廷に現れ、宴会のホールに入って来る緊迫した場面である。

Bis hapel heldez hym in and þe halle entres,
 Driuande to þe he3e dece dut he no woþe,
 Haylsed he neuer one bot he3e he ouer loked.
 Þe fyrst word þat he warp ‘Wher is’ he sayd,
 ‘þe gouernour of þis gyng? Gladly I wolde
 Se þat segg in sy3t and with hymself speke
 raysoun.’

To kny3tez he kest his y3e,
 And reled hym vp and down;
 He stemmed and con studie
 Quo walt þer most renoun. (ll. 221-231)

221行目の“bis hapel”(=this knight)は、緑の騎士のことである。緑の騎士がアーサー王宮廷のホールに入って来る場面が、“heldez”(=goes, proceeds)と“entres”(=enters)という、いずれも現在時制で表されている。緑の騎士は、「危険を恐れず」に“dut he no woþe”(=he feared no danger)、ホールの高座に向かう。貴賓席にいるアーサー王を探すためと思われる。緑の騎士は、誰にも「挨拶ひとつせず」“Haylsed he neuer one”(=he never greeted anyone)、高座を「見渡し」“he ouer loked”(=he looked over)、最初に放った言葉が「どこにいるのだ」“Wher is”(=Where is)、「この一団の主人は？」“þe gouernour of þis gyng?(=the governor of this gang?)と続く bob までの緑の騎士の台詞の直接話法を除けば、すべて過去時制が用いられているのが分かる。最後の wheel を成す4行は、abab と脚韻を踏み、動詞“kest”(=cast)、“reled”(=rolled)、“stemmed”(=stopped)、“con studie”(=did study)、“walt”(=possessed)もすべて過去時制である。大広間の円卓の騎士たちに目を向け、歩き回って立ち止まっては、「この一団の主人」たるアーサー王を探す緑の騎士の様子は、緑の騎士が初めて言葉を発する現在形の台詞の緊張感と相俟って、彼の登場が「歴史的現在」で表現されていることで、この場面に生気を与え、あたかも今、読者や聴衆の目の前に緑の騎士がいるかのような臨場感を与えているといえるのである。

3. クリスマスの祝宴と笑い

冒頭の第1スタンザを別にして考えるなら、この詩は15日間にも渡って繰り返されるアーサー王の宮廷でのクリスマスの祝祭の描写から始まっており、緑の騎士がアーサー王の宮廷に乗りこんでくるのは1月1日の新年となっている。緑の騎士との果し合いに

向けてガウェインが旅立ち、バーティラックの城に辿りつくのが約1年後の12月24日、クリスマス・イヴである。主イエスと聖母マリアに祈りを捧げると、彼はそこに美しい城を認める。クリスマスの祝祭に沸き立つバーティラックの城中に迎え入れられるのである。つまり、この作品の約3分の1は、アーサー王の宮廷とバーティラックの城という2つの宮廷におけるイエス・キリスト「御降誕の季節の華麗な祝宴を背景にしている」(生地6)ことが分かる。2つの宮廷もまた「きわめてキリスト教的」(Brewer 136)だという、この背景だけでも、この詩は極めてキリスト教的であるといえる。

バーティラックの城内では、騎士たちや貴婦人たちが楽しく笑いさざめき、また喜んで食卓につく様子が描かれているが、山本は、こうした様子を描いたガウェイン詩人が「決して禁欲主義のキリスト教詩人ではなかったことをよく表している」(70)と指摘している。緑の騎士が登場する直前の大広間での様子もまた、騎士や貴婦人たち、恐らくは使用人たちも含めた者たちが、プレゼント交換に興じる賑やかな様子が以下のように描かれている。

Loude crye watz þer kest of clerkez and oþer,
 Nowel nayted onewe, neuened ful ofte;
 And syþen riche forþ runnen to reche hondeselle,
 3e3ed 3eres-3iftes on hi3, 3elde hem bi hond,
 Debated busyly aboute þo giftes;
 Ladies la3ed ful loude, þo3 þay lost haden,
 And he þat wan watz not wrothe, þat may 3e wel trawe. (ll. 64-70)

「司祭や群衆たち」の歓喜の「大きな叫び声」(loude crye)があがり、「クリスマス」「Nowel」(=Noel)と人々が何度も叫んでいる様子が描かれている²。裕福な者たちが贈り物を渡すべく走り出てきて、「新年のギフト!と叫んで」「3e3ed 3eres-3iftes」(=yelled New Year's gifts)は、プレゼントを使用人の手助けなしに「自分で」「bi hond」(=in person)(Tolkien 191)渡し、贈り物の中味について「騒々しく話し合っていた」「Debated busyly」とあるように、新年のプレゼント交換に沸き立つ人々の様子が描かれている。「クリスマス!」と何度も叫んでいる彼等がプレゼントの交換をしているのは、厳密にはクリスマスではなく、「新年早々」「wyle nw 3er watz so 3ep」(l. 60)である。当時は「クリスマスよりも新年がプレゼント交換の伝統的な時期」(Harrison 92)であった。

「hondeselle」(=gifts at New Year)も「3eres-3iftes」(=New Year's gifts)もどちらも新年の贈り物を意味しているが、前者は、身分の上の者から従者へのギフトであり、後者は同等の階級の者同士のギフトの受け渡しであり、Handy Dandyのような、どちらの手に物が入っているかを「あてっこするゲーム」の形をとってプレゼントが「手で」(bi hond)渡され

る。手のひらに納まるような小物のプレゼントも含まれていたことが想像できる一節である。しかもこの「あてっこゲーム」は、罰ゲームを伴うものであり、騎士からのプレゼントがどちらの手に入っているかレディが当てられなかった場合、騎士はレディからキスをもらえるものだったようだ (Andrew & Waldron 210)。69 行目の「レディたちがゲームに負けても」“þo3 þay lost haden”(=even though they had lost)、彼女たちが「非常に高らかに笑っていた」“la3ed ful loude”(= laughed very loudly) のは、罰ゲームでのキスに浮かれ騒ぐレディたちの様子が表現されている。アーサー王宮廷でのクリスマスの浮かれ騒ぎは、ちょうどこの1年後の同じ時期にガウェインがバーティラックの城に訪れた時に、「誘惑のゲーム」に巻き込まれていく伏線ともなっているように思われるのである。

緑の騎士がアーサー王に持ち掛ける「首斬り」の挑戦は、首斬りというシリアスな挑戦に見えながら、実は「クリスマスのゲーム」“a crystemas gomen”(l. 283) となっている。アーサー王の宮廷に乗りこんで来た緑の騎士は、武具も身につけず、「裸足」“sholes”(l. 161) であった。「騎士が乗馬するときに靴を履くのは戦いの時だけ」(菊池『中世英語英文学Ⅲ』152) である。つまり彼は、「平穩裡に腕競べの手合わせをしよう」と(池上「自然」3) 訪れたのであり、その片手には斧を持ってはいるが、もう片方の手には「Christmastide に相応しい平和を示す」(同掲書3)「ヒイラギの枝」“a holyn bobbe”(l. 206) を持っている。ヒイラギは常緑の葉に赤い実をつける。全身緑色をした緑の騎士が、この斧で私の首を斬れる勇気のある騎士がいれば斬るがよい、ただし、1年後にお返しの一撃を受ける気があるならば、と首斬りゲームの挑戦をし、アーサー王の代わりにガウェインがその挑戦を受けて、緑の騎士の首を斬り落としたときの飛び散った血の赤が、常緑の葉に赤い実がついたヒイラギの枝と共に、クリスマスの色彩を演出している。また、ガウェインに斬り落とされて床に転がった緑の騎士の首を、その場にいた人々が足で蹴る場面がある。これは、恐怖と緊張から解き放たれて、安堵した人々が自分の前に転がってきた騎士の首を、ほっとして蹴鞠のように扱いフットボールに興じた場面として、高宮は、「悲劇的な場面に挟まれる息抜きの場面」、つまりは「コミック・リリーフ」であると説明している(高宮 128)。首を斬られた騎士は死んでおらず、床に転がった首を拾い上げて、1年後だぞと言いついて去っていく。首斬りという恐怖感漂う場面においても、ホッとした感覚を与える「コミック・リリーフ」が用いられ、クリスマス季節の笑いに包まれていることが分かるのである。

4. 伝統から逸脱した「ガウェイン」の騎士像

中世ロマンスにおいて最も重要視される騎士道的な美德は「誠実」“loyalty”と「武勇」“prowess”という2つの美德である(Matthew 358)。ガウェインは、この2つの美德を象徴する「五芒星」(pentangle) が描かれた盾を所持している。実はこの盾は、「ガウェインを扱った他のロマンスにはない」(生地 10) ものだといわれている。盾の表側に画かれ

た「五芒星」は「誠実」(loyalty)を象徴し、その盾の裏側に画かれた聖母マリアは、常にガウェインに「武勇」(prowess)を授けるものと新居は指摘している(新居6)。ロマンスにおいて最も重要視される騎士の美德を持っている人物として、ガウェインは描かれているようにみえるのである。2度目の一撃で、武勇(prowess)と誠実(loyalty)を試みにかける「首斬りゲーム」の試練に、ガウェインは打ち勝っている(Benson 234)。これは「騎士としての彼の美德を明らかにしている」(横山 243-44)という指摘もある。

また、主人公ガウェインが「敬虔なクリスチャン」(Mills 484)として描かれているのは、ガウェインが誓言を多用するためだと菊池は指摘している。実に21行に1回の割合でガウェインは誓言をし、「誓言の頻度が他の登場人物と較べて極めて高い」(菊池『中世英語英文学I』135)といえる。「神にかけて誓う」というような誓言の用法は、実は中世においては、「特別な意味を持たない感嘆詞、間投詞といった強意的な表現」(Mustanoja 638)であったが、ガウェインの誓言の多さは、単なる強意表現ではなく「ガウェインの宗教的な心情と感情が微妙に反映したものであり」、「本来の宗教性と厳粛さを残した表現」(菊池『中世英語英文学I』47)であったと考えることはできる。

こうした中世ロマンスの伝統とキリスト教的理想を併せ持つガウェインの騎士像は、最後にきて崩れてしまうことになる。これが「中世の<conventionalism>の下の英雄描写から逸脱した描写」(同掲書 35)であり、アーサー王ものの英雄が冒険の成功を収め名誉を勝ち取って帰還する「ブリテンもの」の典型的な return-motif とは逸脱している(新居1)とされる、伝統からの乖離である。

ガウェインは、名誉の帰還を遂げるのではなく、自らが犯した過ちに沈痛な面持ちで帰還する。彼の失敗は、バーティラック城主との3日間に渡る「獲物交換の約束」において、その日手に入れたものは全て城主に報告して渡すという約束を、最後の日に破ってしまうものである。3日目、ガウェインは、城主の奥方から、身につけていると殺されずにすむという「緑の帯」をもらいうける。これから緑の騎士との果し合いに向けて、命の危険を感じていたガウェインは、「緑の帯」のことを城主には報告せずに身につけたまま城を後にしてしまう。つまり、自分の命惜しさに、約束を破ってしまったのだ。緑の騎士が、ガウェインの首に3度、斧を打ち付ける時、3度目だけ首にかすり傷をつけるのは、3日目に「緑の帯」を渡さなかった罰である。ここで緑の騎士が実は城の城主であったことが明らかになる。ガウェインの悔悛の情が示される。

聖アウグスティヌスの伝統によれば、自分を過剰に愛する状態を「食欲」(cupiditas)といった。現在であれば「食欲」は富への欲望である。ガウェインが「自分の命を愛おしく思うがあまり、真理に対する愛、すなわち神への愛よりも己に対する愛を優先した」(Hills 129)ことは、「食欲」に値し、それは罪となる。

だが、中世も12世紀には、早くも地獄か天国かという二項対立の条件提示ではなく、「第三の場所、天国と地獄の中間点、天国への待機場所としての煉獄の思想」(斎藤6)が立ち

上がっていた。斎藤は、この煉獄思想の定着と時を同じくして悔悛の秘跡という魂の救済手段が講じられるようになったとして、煉獄思想と悔悛が密接に結びつくことで、死は生に意味を与えるものとなったことを説明している。つまり、自分の過ちを告白し、罪を悔い、罪を償い、それによって天国への待機の場所ができる。「誰も罪なくして生きえない」（斎藤 9）という考え方である。新居は、このような思想、つまり「“Nemo sine crimine vivit”（いかなる人間も罪無くしては生きることができない）」という宗教観が、中世後期には一般に浸透し、当時の様々な文学作品に影響を与えていると指摘している（新居 13）。

このように考えるならば、「ガウエイン詩人」が描いた「ガウエイン」は、中世ロマンスの伝統から逸脱した騎士像であったかもしれないが、当時の時代性を反映した、まさに等身大の騎士像を描いていたといえるのではないだろうか。

多ヶ谷によれば、この作品の解釈の一つの鍵は、「1月1日の新年、新年の贈り物、新年のゲームをキー・ワードとする物語構造の仕組みである」（多ヶ谷 73）としている。1月1日の新年、緑の騎士がアーサー王の宮廷キャメロット城に颯爽と現れ、「首斬りゲーム」を所望するところから始まり、これを受けて立つガウエインが、1年後に果し合いをするために緑の礼拝堂に向かう途中、立ち寄ることになったパーティラックの城で、しばしの休息を取らせてもらう代わりに、ガウエインがその日城内で得たものと、城主パーティラックが狩りに出かけて得た獲物を、3日間に渡り交換するという「交換の約束」、つまりは「交換のゲーム」が待っている。前述したように、この「交換のゲーム」には、平行して、城主の奥方がガウエインに仕掛けてくる「誘惑のゲーム」が隠されている。ガウエインは3日間に渡って奥方からキスを受け、城主パーティラックからの狩の獲物をももらう代わりに、奥方から得たキスを城主にしなければならなかった。この2つのゲームは、「パーティラックが城の外でおこなう狩も、奥方が城内で行う誘惑も、実は、ともに狩の二様、二つの姿」（多ヶ谷 79）である。田口は、2つのゲームを「狩猟と宮廷愛」（田口 20）としているが、ゲームは「狩猟」の意味があり、奥方がガウエインに仕掛ける「狩猟」でもり、奥方の誘惑の「獲物」はガウエインであった。「狩りを恋愛のアレゴリーとして描く伝統的な手法」（菊池『中世英語英文学 I』38）が用いられているといえるが、物語全体の「首斬りゲーム」の中に、城主との「交換の約束」と奥方の「誘惑」が組み合わされている。「この組み合わせの例は他に見られないものである」（篠原 11）という指摘もある。

「この物語の意味は、ガウエインというキャラクターの中に存在している」（Ker 104）という指摘にあるように、ガウエインの描かれ方には、一方で従来のロマンスの伝統的理想の騎士像があり、また一方でそれを逸した騎士の姿をみることができるのである。

おわりに

以上、*SGGK* という中英語時代における「頭韻詩復興」の最中に成立した中英語頭韻詩を、語彙、文体、描写の観点から考察してきた。

この詩は、中英語の時代にあつて、伝統的な古英語の頭韻詩の韻律法を受け継いでいる。頭韻長詩行において、ガウェインを描写する形容詞は、伝統的な騎士の理想像を類型化するためのものであったが、そこに形容詞の名詞的用法や、「女性」を指示する形容詞群が付加され、同時代の脚韻詩にはみられない特徴が散見された。また、長詩行にみられる歴史的現在の用法は、中英語時代になってから見られるようになったものである。

ガウェイン詩人が伝統から受け継いだ頭韻の長詩行は、伝統から逸脱した文体的特徴を有する一方で、同時代に主流となりつつあった脚韻詩の特徴とも大きく乖離する点があつた。中世ロマンスでは、季節は春を背景とするのが多いのに対し、この作品では荒涼とした冬の情景を主としている（山本 72）。チョーサーが『カンタベリー物語』で描いた中世の春の情景とは対照的である。厳しい冬の自然界は、古英語の叙事詩やエレジーに見られる自然の暗く激しい相を想起させることを考えれば、ガウェイン詩人の「自然描写は表現上伝統的技巧ではある」（池上「自然」14）といえる。冬という季節、特に冬の旅という設定は、「中世文学においては、*penance* つまり告解のための伝統的な機会となっていた」（河崎 55）。その意味で、ガウェインが最後に緑の騎士に対して行う「告解の秘跡」の伏線となっていたといえるであろう。

SGGK という中世ロマンスにおける圧倒的な冬の描写には、古英語時代の頭韻詩のいわば伝統的な自然描写の技法を守りつつ、中世後期においてはむしろ主流であった「春」の描写を避け、むしろそれに「対峙するかのような姿勢」（菊池『中世英語英文学 I』36）を貫いた「ガウェイン詩人」の、強い意志のようなものが感じられはしないだろうか。

中世後期の頭韻詩復興の最中に成立した中世ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』には、「古フランス語ロマンスに見られる文学伝統の枠組みを借りながら、その深層には宗教的な主題が存在」（貝塚 142）していた。冬の厳しい季節を背景としながらも、クリスマスや新年の祝祭に沸き立つ宮廷での「ゲーム」を枠組みとした本詩は、当時の中世後期のヨーロッパにおいて、度重なる戦争や環境の変化に伴う飢饉や疫病の蔓延により、死が身近になっていた人々にとっての「コミック・リリーフ」となっていたのかもしれない。つまり、理想化や類型化へと向かう伝統から乖離した騎士像が、その描写の背景にある自然環境と相俟って、当時の等身大の騎士と同時代的な関心事を呈示し、「聴かせる」詩の音とリズムが、新しい詩法に反発する保守的な環境のなかで、再び伝統と向き合った成果として呈示されているといえるのではないだろうか。

註

- 1 OE 詩の長詩行 (long-line) は、不定数の音節から成り、前半、後半に二分される。各々の半行 (half-line) にはリズムを作る強音節が 2 つずつある。
- 2 本詩の形式は、頭韻を踏む長詩行に、脚韻を踏む“bob and wheel”行がスタンザを構成し、101 スタンザで 4 部構成となっている。
- 3 本稿における SGGK からの引用は全て *Sir Gawain and the Green Knight*. Eds. by J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon. 2nd edition, rev. by Norman Davis (Oxford: Clarendon Press, 1967.) に従うものとし括弧内に行番号を示す。

引用・参考文献

- Andrew, Malcolm, and Ronald Waldron. Eds. *The Poems of The Pearl Manuscript: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. 5th edition. Liverpool University Press, 2007.
- Benson, Larry D. (trans.), Daniel Donoghue. (ed.) *Sir Gawain and the Green Knight: A Close Verse Translation*. Morgantown: West Virginia University Press, 2012.
- Brewer, D. S., “The Gawain-Poet: A General Appreciation of Four Poems,” *Essays in Criticism*, XVII, 1967, pp. 130-142.
- Day, Mabel and Mary S. Serjeantson. “Introductory essays” in *Sir Gawain and the Green Knight*. Sir Israel Gollancz. Ed. London: EETS, 1940.
- Harrison, Keith. (trans.), Helen Cooper. (ed.) *Sir Gawain and the Green Knight: A Verse Translation*. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Hills, David Farley. “Gawain’s Fault in Sir Gawain and the Green Knight.” *The Review of English Studies*, vol. 14, no. 54, 1963, pp. 124-31.
- Ker, W. P., *Medieval English Literature*. Oxford: Oxford University Press, 1948.
- Kottler, Barnet and Alan M. Markman. *A Concordance to Five Middle English Poems: Cleanness, St. Erkenwald, Sir Gawain and the Green Knight, Patience, Pearl*. USA: University of Pittsburgh Press, 1966.
- Mathew, Gervase, “Ideals of Knighthood in Late-Fourteen-Century England,” *Studies in Medieval History Presented to Frederick Mourice Powicke*. Ed. R. W. Hunt, W. A. Pantin, and R. W. Southern. Oxford: Clarendon Press, 1948.
- Millis, M., “Christian Significance and Romance Tradition in SGGK”, *MLR*, LX, 1965, pp. 483-489.
- Mustanoja, Tauno F. *Middle English Syntax*. Tokyo: Meicho Fukyū Kai, 1985.
- Savage, Henry L., “Hunting in the Middle Ages.” *Speculum*, Vol.8, No.1. (Jan., 1933), pp. 30-41.
- Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, eds. Norman Davis, rev. *Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd edition, Oxford: Clarendon Press, 1967.
- 池上忠弘 「Sir Gawain and the Green Knight における the Temptation について : その詩的

- 技法に関する一考察」慶應義塾大学藝文学会編『藝文研究』第14・15号、1963年、62-75頁
- 「Sir Gawain and the Green Knightにおける自然」日本英文学会編『英文学研究』第40巻第1号、1964年、1-15頁
- 「The Green Knight と The Beheading Game——中世ロマネスク文学の構成」慶應義塾大学藝文学会編『藝文研究』第11号、1961年、137-150頁
- 生地竹郎「SIR GAWAIN AND THE GREEN KNIGHTにおける CHTHOLICISM」日本英文学会編『英文学研究』第51巻、第1-2号、1974年11月、5-21頁
- 貝塚泰幸「死を前にした人、Gawain」千葉商科大学国府台学会編『千葉商大紀要』第52巻第2号、2015年3月、133-146頁
- 加藤直良「中世英語に於けるフランス語の影響——*Sir Gawain and the Green Knight* の場合——」岐阜経済大学学会編『岐阜経済大学論集』第16巻第2号、1982年6月、101-111頁
- 河崎征俊「Forest から Court へ : Sir Gawain and the Green Knight における Topographical Images をめぐって」駒澤大学文学部英米文学科編『英米文学』第38号、2003年3月、49-61頁
- 菊池清明『中世英語英文学Ⅰ——その言語・文化の特質』春風社、2015年
- 『中世英語英文学Ⅲ 中世イギリスロマンス ガウエイン卿と緑の騎士』春風社、2017年
- 厨川文夫『中世の英文学と英語』研究社新英米文学語学講座(1)、研究社、1964年
- 斎藤勇「Nemo sine crimine vivit : 生と孤独, 中世文学の場合」同志社大学人文学会編『同志社大学英語英文学研究』第65号、1995年12月、1-18頁
- 境田進訳『ガウエイン詩人全訳詩集』小川図書、1992年
- 篠原結城「ガウエイン詩人とその周辺 : 『ブリクリウの大宴会』、『緑の騎士』、そして『サー・ガウエインと緑の騎士』における首斬りゲーム」関東学院大学英語英米文学会編『Oliva』第20号、2013年、1-14頁
- 鈴木栄一「『サー・ガウエインと緑の騎士』——緑の騎士の正体——」生地竹郎編『チャーサーとその周辺』1973年、161-183頁
- 「サー・ガウエインの性格」生地竹郎編『チャーサーとその周辺』1973年、184-200頁
- 鈴木哲治「頭韻詩『サー・ガウエインと緑の騎士』における韻律‘wheel’行の考察」早稲田大学大学院文学研究科編『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊』第48巻、2002年、13-21頁
- 高宮利行「中世英文学におけるコミック・リリーフ『サー・ガウエインと緑の騎士』のフットボールの場合」慶應義塾大学藝文学会編『藝文研究』第88号、2005年、127-131頁

- 多ヶ谷有子「*Sir Gawain and the Green Knight*における修辭的詩形の意味と役割」関東学院大学文学部編『関東学院大学文学部紀要』第120・121号合併号上巻、2010年、73-107頁
- 田口まゆみ「『ガウェイン卿と緑の騎士』の諧謔と嚴肅」奈良女子大学文学部英語・英米文学科尾形・森本両教授退官記念論文集刊行会編『尾形敏彦・森本佳樹両教授退官記念論文集』山口書店、1985年、14-25頁
- 田島松二「中英語頭韻詩における絶対形容詞——ガウェイン詩群を中心に」九州大学英语英文学研究会編『英語英文学論叢』第53号、2003年、63-84頁
- 新居明子「英雄の帰還——*Sir Gawain and the Green Knight*におけるReturn-Motif——」同志社大学英文学会編『主流』第59号、1998年3月、1-17頁
- 水鳥喜喬「*Sir Gawain and the Green Knight*にみられるHistorical Presentについて」大阪市立大学文学部編『人文研究』第19巻第7号、1968年、461-486頁
- 「*Sir Gawain and the Green Knight*にみられるHistorical Presentについて-2-」大阪公立大学大学院文学研究科編『人文研究：大阪公立大学大学院文学研究科紀要』第20巻第7号、1969年1月、76-90頁
- 山本俊樹「『サー・ガウェインと緑の騎士』論——サー・ガウェインの起死回生」恵泉女学園大学編『恵泉女学園大学人文学部紀要』第5号、1993年1月、69-89頁
- 横山茂樹「Gawain 卿の帰還:その「あやまち」と「許し」」同志社大学英文学会編『主流』太田藤一郎先生追悼 別巻、1982年3月、237-250頁